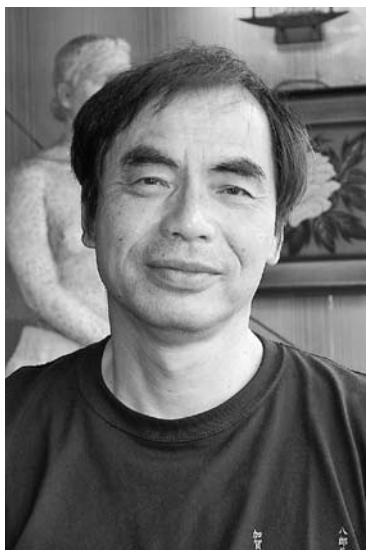


見直したい、自然や歴史と連帯した家づくり

哲学者 内山 節さん

日本人はキツネにだまされなくなった

群馬県の上野村と東京との二重生活をして四〇年近くになります。ヤマメやイワナを釣りに行った上野村が気に入って、「ここで暮らすのもいいかな」といった感じで住みはじめました。いまは畑を一五〇坪くらい作っています。庭から続く山も一ヘクタールくらいあって、急傾斜ですが、とても使いやすい。キノコもたくさん採れます。都会に比べたら、村の暮らしのほうがはるかに面白いですよ。村わが家は築一〇〇年はたっているとはいえず、



いわゆる「古民家」の雰囲気はなくて、当時やつつけ仕事で造ったような家です。決している材料を使ってはいるわけはありませんし、本職の大工さんではなくて「大八」が仕事をしたいと思われる造りです。大工まではいかないから九の前の八。昔は、農業などの傍ら、頼まれるとちよつとした大工仕事もする人たちが村には結構いました。

その程度の家が、一〇〇年たつてもまるでガタがこない。隙間風は入りますよ。だけど、基本はしっかりしています。手抜きの家でもちやんともつことに感心しています。

私は、北海道から九州まで山村を泊まり歩いて釣りをしていた頃に、村の人からいろいろ話を聞くことができました。そこではしばしば、キツネにだまされた村人の話が出てきました。ところが、一九六五年頃以降、そういう話をまったく聞かなくなりました。それは日本全国一斉の現象です。私は、この頃を境に「キツネにだまされた」と当たり前のようには話す「人間と自然との関係」がなくなつたと見ています。

私が上野村に住みはじめたのは一九七〇年代に入ってからでしたから、すでに村人がキ

内山 節（うちやま・たかし）

1950年、東京都生まれ。都立新宿高校卒。哲学者。1971年に群馬県上野村の古い家を譲り受け、東京と往復しながら暮らす。元立教大学異文化コミュニケーション研究科特任教授。NPO法人「森づくりフォーラム」代表理事として、森林ボランティアならではの森のかかわり方についても提案している。JMRA 特別会員。

著書に『自然と労働』『森にかよう道』『貨幣の思想史』『戦争という仕事』『哲学の冒険』『怯えの時代』『日本人はなぜキツネにだまされなくなったのか』ほか、多数。

ツネにだまされたという話はありませんでした。東京に住む人間は、東北の山村ならまだキツネにだまされるような「人間と自然の関係」が残っているだろうと思うわけですが、魚の気配からすれば、関東より少しよいといった程度でした。七五年頃は、下北半島まで北上して、ようやく昔の雰囲気少し残っているかな、という印象でした。

七五年というと、高度成長期の最初のひと区切りの頃です。あの時期に自然が大きく変わった理由は、いまでもよくわからないですね。川の上流で大規模な農地開発やリゾート

開発、ダム建設なりがあつて、川の状態が大幅に変わったのであれば理由がわかりませんが、多くの地域でそれほど大きな変化があつたわけではないので、ほんとうに不思議なことです。

しかし一方で、日本人は、非常に合理的、功利的な目で自然を見るようになりました。森についても、「CO₂を固定化している」というように見ているのです。こうした見方ばかりになってしまつと、合理的、功利的ではない自然がだんだん見えなくなつてきます。最近、男鹿半島の山間部に住んでいるおばあさんがキツネにだまされたそうですので、話を聞きに行つてみなければと思つてい

都市とは違う農村の住宅の造り

私は都市部の住宅というのは、いつの時代も基本的にはバラックだと思つています。地方から都市部に仕事を求めて流れ込んできた人たちが、とりあえず住める場所を造るところから出発します。まず掘つ立て小屋みたいなバラックを造つて、住む場所を確保する。何代か住み続けるうちには、小資産家になった人たちが大きな家を造りはじめます。しかし一方、その時にまた新しく流れ込んできた人たちがバラックを造つている。そういうことの繰り返しだつたと思うのです。江戸期の城下町の場合は、特別に都市計画がなされたので、少し違つてもいいかもしれません。

それに対して、かつての農村の住宅の造りは、都市とはまったく違つてきました。近くに資材がありますし、また何代も暮らすということとを前提にしています。それから住宅が、居

住空間であり、かつ仕事空間であり、さらに接客の空間でもあります。昔は、どこの家も接客の部屋があるか、あるいはいざとなったら客間に変えられる部屋をもっていました。今和次郎さんもおっしゃっていますが、農村の家は、生活の場、仕事の場、接客の場を統合しています。

上野村では、私が行ったばかりの頃は、家を造り終えた時点で、次の新築に備えた木材を用意していました。大黒柱にするケヤキを一、二本伐って、寝かしておくのです。とくにケヤキは暴れますから。それで、次の新築はだいたい一〇〇年から二〇〇年後です。そうして、いよいよ建て直しが近づく、ほかの部材を集めはじめる。といっても、実際建てるのはさらに二、三十年先です。それが村の人たちの家づくりに対する時間感覚であって、家づくりは何代にもわたります。

庶民が造る家には、世界じゅうどこでも、基本的に近場で手に入る材料が使われます。日本の場合には木が一番手に入りやすい。木はしかも、非常に扱いやすい便利な建築材です。木で柱を造り、これもまた手に入りやすい土を塗り込んで壁を造る。たとえばバラックであっても、近場の材料で造っているかぎりは風土と調和した家ができます。

それが現代に入ると、市場の変化で世界じゅうの材料が入ってくるようになってしまった。そのため、近場の材料で造るほうが、むしろコストが高くつくようになりました。

人々はかつて永遠性を確信していた

いま、総理大臣が盛んに「友愛」と言っていますが、これはヨーロッパ的な人間同士の

連帯を意味する言葉ですね。これももちろん必要です。しかしやはり、人間だけの連帯ではいけない。自然との連帯、歴史との連帯も考える必要があるでしょう。

ここで歴史というのは、何年に何が起きたというのではなくて、人々はどんな歴史をつくってきたのかという、もつと漠然としたものです。たとえば上野村では、村の人が「この村は歴史的には」と話すときに、「何年に何があった」と言っているわけではないのです。「森ではこういうふうにして生きてきた」「こうやって働いてきた」ということを言っているわけです。

そうした歴史が途切れてしまうと、人間の足元が不安定になってしまふ。戦後の日本は、高度経済成長を進める過程で「そんな歴史、切ってしまう方がいい」というかたちで何十年か突っ走ってきた。それが、この二、三十年は徐々に歴史回帰していると考えています。自然との付き合い方でも、どういう歴史の中で人々は生きてきたのかに関心が向き、そこには捨ててはいけないものがたくさんあることがわかってきた。歴史に育まれ造られてきた家屋も、捨ててはいけないものとして見えてきたのでしよう。

かつての日本の社会には、わが家の永遠性や村の暮らしの永遠性に対する確信がありました。自分たちを守ってくれているものへの、感謝を込めた祈りといってもいいと思います。その祈りの中で家を造り、暮らしをつくり、村をつくってきた。現実には、一〇〇年くらいの単位では、災害や飢饉も起きます。そうしたなかで、どう生きていくか、という発想をしていました。これを戦後の日本人は失った。こういうものを投げ捨ててしまふと、永

遠性は見えなくなると思っています。功利的な面ばかりが見える。そうすると、どちらが便利かという話ばかりになっていきます。

かつての暮らしを取り戻していこうとするのが、歴史との連帯です。同じことが文化との連帯でもいえます。文化には新しくつくられる文化もありますが、建築の文化も含めて、それぞれの地域には長い歴史の中でつくられた文化があるわけですね。それらとどう結んでいくか。地域文化や伝統文化という言葉がいろいろな場面で使われるようになり、連帯は広がっていると思います。

ただ、微妙なものはいくらもありませんね。たとえば山形県鶴岡市黒川の薪能たぎは本来、奉納の舞いを舞っている人とそれを見ている人が、ある意味で一体となりながら、人間の世界を捨てて神の世界に行く場所です。いま薪能は流行ですから、たくさん観光客が見に行きます。その結果、確かに薪能は滅ぶことなく残っています。でも一面では、ただの興業になってしまった。白川郷も、建物は残っていますが、テーマパークのようですね。本来、建物といっしょに存在していた生活はありません。

また、伝統的な町並みが保存された通りでも、朝自宅から出勤してきて店を開けるといふみやげもの屋が多いですね。売っているみやげも、少なからず世界じゅうから入ってきたものです。建物だけを維持するのも一手ですが、すべてではないと思います。

ギクシャクした動きではあっても、「そんなものは古くていけない」という時代から、少し風向きが変わったことは確かです。次のステップに向かいたいものです。